

敬語小委員会における論点の整理－3

(1) 「具体的な指針」作成に当たっての基本認識

- ◎ 具体的な指針で示す内容を絞り込んでいく。
→ どこに焦点を当てていくか、小委員会の共通認識を形成する必要がある。
- 敬語を使用するときの「よりどころ」となることを目指す。
→ それぞれの分野で手引を作成するときの「よりどころ」となるもの。各分野の固有性を捨象したもの。
→ 上記のことは、個人においても、同様のことが言えるのではないか。(下記の(2)の「敬語が必要だと感じているけれども、現実の運用に際しては困難を感じている人たち」への対応。)
- どの分野、どのような個人にとっても基本となる敬語の「よりどころ」を示していく。(敬語運用能力の基盤となるもの。)
→ 即戦力として、運用能力を高めるようなものも必要でないか。

(2) 「具体的な指針」の想定する対象者について

- 敬語が必要だと感じているけれども、現実の運用に際しては困難を感じている人たちに対して、その適切な運用に資する分かりやすい指針が必要ではないかと考えた(国語分科会報告)。
→ 敬語に対する意識がない人の扱いをどうするか。
- 学校教育(日本語教育を含む。)や社内教育で利用できるという観点

(3) 「具体的な指針」が扱う範囲について

- 非言語(身振りなど)まで含める。
- 敬意表現は、話し言葉ばかりでなく書き言葉においても見られるものである。さらに、言葉以外の種々の側面、すなわち、表情、身振り、行動、服装などにまで広げて考えることもできるが、ここでは言葉、主に話す側から見た話し言葉に関係するものを扱うこととする(答申「現代社会における敬意表現」)。
- 答申で定義する「敬意表現」のうち、「具体的な指針」として示す必要のある部分に限定する。

(4) 答申「現代社会における敬意表現」との関係について

- 答申「現代社会における敬意表現」の趣旨を踏まえ、その趣旨が確実に生かせるような「具体的な指針」の作成を目指すべきである(国語分科会報告)。
→ <答申「現代社会における敬意表現」の趣旨>をどうとらえるか。
→ <答申「現代社会における敬意表現」の趣旨>を<確実に生かせる>ということはどう考えるか(⇔「国語分科会報告」の中の具体例)。

(5)「具体的な指針」のイメージについて

1) 指針の構成

- 大きくは、「前文」と「本編」で構成したらどうか。「敬意表現の考え方」や総論的なことは前文に述べ、本編では具体例を中心にしたらどうか。
- 前文で取り上げる内容は何か（本編を生かしていくための基本的認識等）
- 本編で取り上げる内容は何か（例えば、※評価のゆれている表現の整理等）
- ※ ①例えば「とんでもございません」をどのように位置付けるか、②意見が分かれそうな危ないところは触れない方がいいか等。
- また、整理していくのときの基本的な立場（どの程度までの将来を想定するのか等）をどのように考えていくか。

2) 具体性の持たせ方

- 複雑な敬語使用の実態をどのように具体化していくのか。
- <場面・人間関係・事柄の軽重>といった具体性と、その表現の仕方（絵で示すか等）の具体性、の二つをどう考えるか。
- 敬語のとらえ方（場面・気持ち・中身・形など）について、どのように考えるか（示していく必要があるのか）。

3) 具体例の選定及び扱い方

- 敬語の体系性に焦点を当てるか、具体例の集積に焦点を当てるか。
- 敬語の体系性についてどのようにイメージするか、帰納的・演繹的な示し方との関連はどうか、具体例を挙げる目的をどう考えるか。

4) その他

- 敬語で困っている人たちの疑問に答えてくれるような「指針」が必要ではないか（上記の（2）との関係）。
- 冊子の分量をどう考えるか（大部のものか、コンパクトなものか）。
- 付録として、DVDやCDを付けたらどうか（eラーニングの観点も）。

(6)「具体的な指針」の普及方策について

- 普及・浸透させていくために必要な観点は何か
- 日常生活で役立つ、分かりやすく取っ付きやすい、簡潔な記述という観点
- 現実の敬語使用の実態との乖離をどのようにとらえていくのかという観点